

内山善代子花菱

茅ヶ崎市民文化振興財団

下記、添付議案は、10日の理事会で可決承認されました。志中 徳雄

2 市民文化の創造及び育成  
市民が文化活動に参加し、また創造することを支援するとともに、人材育成のため事業を行う。

6 (仮称)山田耕筈没後40年記念事業	未定	未定	410
合 計			10,252

共催先！茅ヶ崎交響楽団、2/「山田耕筈」と「赤とんぼ」を愛する会

文化情報の収集及び提供事業 (事業費5,888千円)

文化振興を図るため、年2回情報紙を発行する。

ホームページを管理・運営する。

文化遺産に関する啓発事業 (事業費883千円)

埋蔵文化財調査の発表及び展示会と親子向けの考古学講座を開催する。

11月とのみ説明です

## 「山田耕筈」を讃える音楽祭

没40年

東京での忙しな生活を逃れ、茅ヶ崎に移り住んだ山田耕筈。傷心の中、晴れた茅ヶ崎の自然と家族に癒され、創作意欲が湧き、童謡「赤とんぼ」「この道」などをはじめとする数々の名曲を作曲した。山田耕筈にとって茅ヶ崎は、音楽家として再起を圖り、新たな一歩を踏み出す“再生の地”であった。

みなさまはこの事実をご存知でしょうか？  
今回、私たちはこの事実を語り継ぎ、その歌を歌い継ぐべく音楽祭を開催いたします。

山田耕筈ご長男、山田耕嗣氏が茅ヶ崎時代の父とその思い出を語る。

プロの歌手が、茅ヶ崎市民が、山田耕筈の愛すべき童謡を歌う。

展示会では「赤とんぼ」グッズが並ぶ。



「若き日の山田耕筈・菊尾ご夫妻」

日野原重明氏 (聖路加国際病院理事長、山田耕筈氏の墓所を看取る) が、山田耕筈を語る。

みんなで「赤とんぼ」を始めとする山田耕筈の名曲を歌い楽しむ。

2005年11月23日(水・祝)14:00開演(13:00開場)

茅ヶ崎市民文化会館 大ホール 全席自由 1,000円

主催：没40年「山田耕筈」を讃える会

共催：「山田耕筈」と「赤とんぼ」を愛する会・茅ヶ崎市民文化振興財団

後援：茅ヶ崎市民・茅ヶ崎市教育委員会

協力：茅ヶ崎市商店会連合会・茅ヶ崎市地域産業連絡会・松林中学校合唱部  
文教大学演劇部・同歌楽部・同映画製作研究部

お問い合わせ先：没40年「山田耕筈」を讃える会 TEL7570  
TEL:090-9314-1831 FAX:090-9314-1832 info@yamada-kousaku.com

プレイガイド ※9月1日(木)前売開始

- 茅ヶ崎市民文化会館 0467-85-112
- 茅ヶ崎市民親善協会 0467-84-037
- 長谷川楽器店本店 0467-86-172
- 川上書店茅ヶ崎ミネ文具店 0467-87-382
- ハスキーズギャラリー 0467-89-181
- クラブショップ段 (図書館前) 0467-88-266
- 濱田屋南口店 0467-83-799
- 林水泳教室 0467-86-686
- ロコスポーツ湘南 0467-87-651
- タカラヤ(エメロード) 0467-82-247

## 神奈川新聞2005年11月24日

# ゆかりの山田耕筈讃え

## 茅ヶ崎で市民音楽祭

### 名曲「赤とんぼ」など合唱

山田耕筈は一九二六年、家族とともに茅ヶ崎市南湖に移り住んだ。今年、市民や地元学生などがお国民に愛される「赤とんぼ」は、その時期に生まれたとされる。耕筈が残した歌曲の豊かさを見直し、茅ヶ崎に新たな活力を呼び起こそうと、市民や地元学生たちが二〇〇四年、「没四十年山田耕筈を讃える会」(土井泰彦会長)を結成。音楽祭は、同会が初めて企画、主催した。市民の合唱で「チラチラ小雷」「ペイチカ」などが演奏され、ソプラノ歌手西由起子さんが「かたらの花」「松島音頭」を披露した。いずれも三木露風、北原白秋らの詩と出会い生まれた名曲だ。

童謡「赤とんぼ」などで知られる作曲家・山田耕筈をたたえる音楽祭が十三日、茅ヶ崎市民文化会館で開かれた。(丸山 孝)



フィナーレでは、山田耕嗣さんや日野原院長らも加わり、来場者全員で声を合わせた「茅ヶ崎市民文化会館

明さんが思い出を語った。日野原さんは「耕筈が」日本人の心に染みいる歌曲を作ることができたのは、よき詩人との出会いがあったことが大きい。その中でも傑作の「赤とんぼ」が茅ヶ崎で生まれたことは、この地に住む人の喜びであり誇りといえる」と語り、いつまでも歌い継いでほしいと訴えた。

フィナーレでは、千四百人を超える来場者が、「赤とんぼ」を歌った。

また山田耕筈の長男、「入院した聖路加国際病院の名誉院長・日野原重

第21回 学習発表会 山田耕筰；没後40年祭



日野原重明先生が赤とんぼを指揮する

らいふ

「赤とんぼ」や「からたちの花」の作曲者として知られる山田耕筰さんが亡くなられてから40年。東京・成城の自宅で永眠されるまでの15年間、私は彼の主治医を務めました。今年に入って記念イベントがいくつか開催され、11月23日には神奈川県茅ヶ崎市内で「山田耕筰」を讃える音楽祭が開かれました。茅ヶ崎は彼が一時期を過ごし、「赤とんぼ」や「この道」を作曲した土地です。彼の残した歌曲作品は、日本語の語感をいかしたという特徴があります。詩人の北原白秋との付き合いは深く、今でも愛唱される歌曲の数々を共に生み出し、日本語詩と音楽の融合に成功しました。白秋と詩人との親

94歳・私の証 あるが、行く 日野原重明

交は、作曲のモチーフ探しを助けてました。友人の存在が彼の仕事を成就させた一つの要因といえるでしょう。また、日本初の交響楽団を組織するなど、ヨーロッパ音楽導入に尽力した第一人者でもあります。



ご対面

山田耕嗣氏と日野原重明先生



耕筰氏は音楽学校に進む前、神戸市の関西学院中等部で学んでいました。ここは私の母校でもあり、私は氏が創設したグリークラブに所属していました。私が初めて氏を往診したのは50年ですが、実はこれも、グリークラブOBで私の親友の佐藤慈郎君の紹介でした。当時、氏が住んでいた田園調布の家の玄関には「目下作曲中の木札がかけられていました。夫人が部屋にお茶を持っていても、「想が逃げる」と入室を断られたとのこと。氏は60歳の時に脳梗塞で倒れ、左半身にまひが残りました。

た。それでも精力的に作曲を続けられ、時にはオーケストラで指揮することもありました。一方で、赤坂の料亭で毎晩、ビールを何本も飲み、夜半に帰宅すると、すべし自室にても、翌日の正午まで作曲し続けたという逸話も残っています。聖路加国際病院入院中も、模範的とは言いがたい患者でした。「お水をもっと飲んでください」と頼んでも、耕筰氏は「21歳の時にドイツ留学して以来、水分はすべてビールからとっている。水は飲んだことがないから飲めない」と主張され、ちむなく看護師を納得させてビールを水代わりに処方したこともありま

す。病院を抜け出すこともしばしば。外出許可をとっては、運転手に命じて愛車デボネアで高速度道を猛スピードで走らせたそうです。入院中はよく利き手の右手で病室のスケッチや自画像を描いておられました。私が「先生は絵が上手ですね」と声をかけると、「画家にならうと思っただとがある」とのこと。画家の東郷青児が作曲の弟子入りを耕筰氏に申し入れた時に「君はむしろ絵の方に行きたまえ」と答えられたこともあるそうです。診察の時に耕筰氏から直接聞いた話です。どうやら彼は人を見抜く才能もあったようです。

絵と題字・小田桐 昭